

気象予報士
NHK「ニュース7」気象キャスター

寺川奈津美 君

【てらかわ なつみ】山口県下関市生まれ。2006年理工学部応用化学科卒業。銀行員、学習塾講師を経て、NHK鳥取放送局情報番組キャスターに。2008年、気象予報士資格取得。2011年4月からNHK「ニュース7」の気象キャスター。株式会社ウイング所属。趣味はランニングとジャズダンス。

進むべき道を見つけられず悩み 紆余曲折を経て気象キャスターに 気象予報の奥深さに、今も学びは続く

子どもの頃から抱いていた
アナウンサーへの漠然とした憧れ

——大雪、大雨、大型台風など、近年の日本列島は、自然災害に翻弄され続けています。夏の暑さ、冬の寒さも厳しく、毎日の気象情報の大切さを実感します。気象予報士の寺川奈津美さんは、NHK「ニュース7」の気象キャスター。学生時代から気象予報士を目指していたのですか？

寺川 いいえ、その頃の私は、自分が本当にしたいことは何なのかわからずに悩んでいました。ただ、漠然と報道の世界で働きたいとの思いがありました。きっかけは、小学生の頃にテレビのアナウンサーに憧れの気持ちを抱いたことです。中学生になり、当時通っていた学習塾の先生に「寺川さんはアナウンサーに向いているかも」と言ってもらったことで、さらに気持ちが高まりました。たぶん先生は気軽に言ったのですが、中学生なりにアナウンサーへの夢をふくらませました。

地元の高校では、進路指導の先生から慶應の受験をすすめられました。先生は私がアナウンサーを目指していることをご存じでしたし、合格に向けて一生懸命に勉強しました。アナウンサーなら文系

学部と思われるかもしれませんが、理系科目が得意で、特に化学が好きでしたから、理工学部を選択することのためらいは一切ありませんでした。

そして念願がなつて塾生になれたものの、大学では多くの優秀な人々がしっかりと目標を持ち勉強に励んでいる姿を目の当たりにしました。「マスコミ業界が研究者の道に進みたい」などという安易な考えは、学年が進むとともにもろくも崩れ去りました。就職活動を迎える頃には、漠然とした思いのまま、アナウンサーを目指して首都圏の主なテレビ局を全て受けましたが、あえなく撃沈。振り返ってみると、子どもの頃からの憧れの延長で入社試験を受けたものの、何としても報道の仕事に携わりたいという気持ちがあったのだと思います。全滅の結果は当然でした。

——その時点では、気象予報士は視野に入っていなかったのですね。

寺川 はい、まったく。気象予報士の存在を知ったのは、金融関係の会社に就職してからのことです。自分の持つ可能性について就職後も考え続け、自分なりにアンテナを張ってさまざまなことを模索していました。本来は就職活動中につきかりと考えるべきではないことなのに、

遅すぎますよね。そのような折、書店で偶然にも気象キャスター特集している雑誌を見つけ、そこに資格のことも書いてあったのです。理数系は得意分野だし、マスコミ業界への就職にも役立つかもしれない、気象予報士の資格こそ私にぴったりじゃないかと感じ、道が開ける思いがしました。仕事を続けながら、早起きして勉強する生活を1年間続けました。

気象予報士の資格試験は、大きく3つに分かれます。予報業務に関する一般知識と専門知識を問う2種類の学科試験のほか、天気図を読んで予報を作成する実技試験があります。働きながら学科試験の1つに合格し、手応えを感じました。そこで1年以内に残りの2つに合格しようとして、会社を辞めて実家で試験勉強に専念しました。学習塾でアルバイトをしながらですが、勉強時間は十分にあると余裕を感じていました。ところが残念ながら不合格。自分の甘さに落ち込みました。

気象予報士の役割をあらためて自覚した 2011年正月の山陰豪雪の被害

——ここ数年の気象予報士試験の合格率は5%以下とかなりの難関で、複数回受験する人も多いようです。

寺川 家族は浪人生活をずっと応援して

くれましたが、ストレスや不安な気持ちなどから母親とはささいなことが原因で言い争ってしまったこともあります。しかし、どうしても諦める気にはなれず、あと1回だけ受験すると決めて勉強を続けました。母の厳しさは、「自分の夢は自分の力で実現させなさい」という励ましのエールでした。次の挑戦で2つの試験に合格することができたのは両親のおかげだと、感謝しています。

実は合格発表の前に、NHK鳥取放送局でリポーターをしていた高校時代の友人が、同局の昼の情報番組のキャスター募集のオーディションを受けてみないか



鳥取放送局時代 子どもスポーツ教室取材にて

と声をかけてくれました。高校時代にアナウンサーになりたい、と言っていた私のことを覚えていてくれたのです。持つべきものは友人です。そのオーディションに合格して採用されたのとはほぼ同時に、気象予報士試験の合格通知も届きました。もともと、その資格をすぐに生かせる状況にはなく、NHK鳥取放送局のキャスターとしての仕事をスタートさせました。

学習塾の講師として多くの子どもたちと接した経験から、元気な子どもたちと世界の未来を担う宝物であると感じていました。そこで、さまざまな子どもたちの姿を多くの人に紹介するために「とりキッズ」という番組を提案し、県内を駆け回って子どもたち取材しました。地方局は人が少なく、企画、取材、撮影、編集からキャスターまでこなしたため、目の回るような忙しさでした。でもカメラと三脚を担ぎ、電車やバスに乗って取材に行くことが楽しくてなりませんでし



た。最初ははにかんでいた子どもたちも、次に会うと笑顔で駆け寄ってきてくれたりして、毎日がとても充実していました。そんな日々を送っていた私に、気象予報士としての役割を強烈に自覚させる出来事が起きました。2010年の大晦日から翌年元旦にかけての山陰の豪雪です。地元の農業や漁業は大きな被害を受けました。休暇で下関に帰省していた私は、テレビで被害の深刻さを知り、既に雪が降り始めていた年末に自分が担当した放

送の中で、気象予報士として何か伝えられることがあったのではないかと悔やみました。生活情報キャスターの仕事からもう一步踏み込み、「いつもの雪とは違うレベルの豪雪です」と、視聴者の心に響く言葉を伝えることが、報道の世界にいる者の、そして気象キャスターの使命なのだと思付きました。取材で知り合った農家の方や漁師さんたちの顔が浮かんで胸が痛み、とてもつらいお正月になりました。

この出来事が、明確に気象キャスターを目指す契機となりました。NHK鳥取放送局との契約期間が終了すると、多くの気象キャスターが所属している株式会社ウイングの一員になり、2011年4月からNHKの「ニュース7」の気象キャスターを務めています。全国放送ですから、両親や祖父、友人たちも喜んでくれたのですが、実はそこからの大きな試練の始まりでした。当時の私は気象に関する専門知識も分析力も足りず、伝える能力も未熟で、自分のふがいなさを痛感させられる日々が約1年間続きました。気象庁が発表するデータをもとに分析し、視聴者に何をどう伝えるかは各番組

の気象キャスターに任されています。毎日行いうミーティングで、そのベースとなる予報を気象キャスター全員で検討し、内容をすり合わせます。番組ごとに発信する情報に差異があつてはならないからです。今は少し余裕が出てきたとはいえ、常に勉強は欠かせません。経験を積み重ねるほど、気象予報の難しさ、奥深さを実感しています。大学生の頃よりも、現在の勉強量の方がはるかに多いと思います。

気象キャスターとして特に記憶に残っているのは、1年目の2011年9月に発生した台風12号に伴う紀伊半島豪雨です。1000mmの降雨量を予報し警戒を呼びかけたのですが、1000mmの雨が、河川の氾濫や土砂崩れなど、どれほど甚大な被害をもたらすのかを、その頃の私はまだ理解していませんでした。言葉足らずだったのでと、悔しさや申し訳ないという思いが今も残っており、勉強に励み走り続ける原動力になっています。

「ミス慶應ですよ」と言われ
「いえいえ、理工学部だけのミスです」と

——学生時代の思い出には、どんなものがありますか。

寺川 思い出深いのは、金田一真澄先生のロシア語の授業です。「自分がロシア語

を本格的に学び始めたのは30歳近くになってから。その後勉強を重ね、今は教える立場になっている。何かを学び始めるのに遅すぎるということはありません」とおっしゃったことが、自分の将来に不安を抱えて悩んでいた当時の私には、大きな励みになりました。

女子バスケットボールのサークルにも所属していました。ユニークな集まりで、サークル内では敬語禁止でした。学年にとらわれず、上下関係なしで楽しみたいよという事です。

——ところで、初代「ミス矢上」に選出されたそうですが。

寺川 懐かしさも恥ずかしさもある思い出です。出場者の募集が難航し、必死になっている研究室の友人に頼み込まれて、断り切れずに出ました。当日になっても、「どうして出てしまったのだろう」と。

投票タイムになると、研究室から友人たちが白衣のまま来てくれたり、サークルの仲間や金田一先生まで投票してください、と素敵な友人と先生を持ったものだとうれしくなったお祭りでした。私にとっては学生時代のちょっとした思い出なのですが、この仕事をするようになり「ミス慶應になったそうで」と言われると、「とんでもない。あくまで理工学部のイ

ベントです」と説明しなければならず、気恥ずかしさも感じています。

——最後に塾生へのメッセージをお願いします。

寺川 私が気象キャスターの道にたどり着くまでには、紆余曲折がたくさんありました。でも、今やりがいのある好きな仕事をしていることに、大きな幸せを感じています。皆さんの中にも、将来のことに迷いや悩みを抱えている人がいると思いますが、目の前のことを一生懸命にやっているうちに、少しずつ目標がはっきりしてくるものです。あせらずに、自分をしっかりと見つめてください。

——ありがとうございました。

